

# 教育標語の精神を身に付け キャリア形成の“背骨”に

## 日本福祉大学

日本福祉大学では、「日本福祉大学スタンダード」をはじめ4つの大学教育改革プログラム(GP)が稼働している。この中で正課、および正課外の活動にキャリア教育を盛り込んでいる。社会人としての基本的な力、加えて日本福祉大学らしい「福祉力」を身に付けられるよう工夫し、指導にあたっている。

### 4つのGPプログラムが相互に連携・補完

日本福祉大学では、文部科学省のGPに選定されたプログラムが複数稼働している。その中でも、図表に示した4つのGPが、社会で役立つ人材を育成するうえで重要な役割を果たしている。これらのGPをベースに、建学の精神から生まれた「万人の福祉のために、真実と慈愛と献身を」という教育標語を体現できる、「相手の立場に立てる人材」を育てる方針だ。

「日本福祉大学スタンダードきょうゆうプログラム」では、教育標語の中の言葉を「真実」→「見据える力」、「慈愛」→「共感する力」、「献身」→「関わる力」と言い換えている。さらにこの3つに共通して必要となるのが「伝える力」であるとし、これら4つを同大学で学ぶ誰もが身に付けるべき力としている。これが日本福祉大学の考える学士力だ。学生が学士力を身に付けると同時に、教員のFD、職員のSDを加えた三位一体のプログラムでもある。

この日本福祉大学スタンダードは、学生および大学組織全体の底上げを目

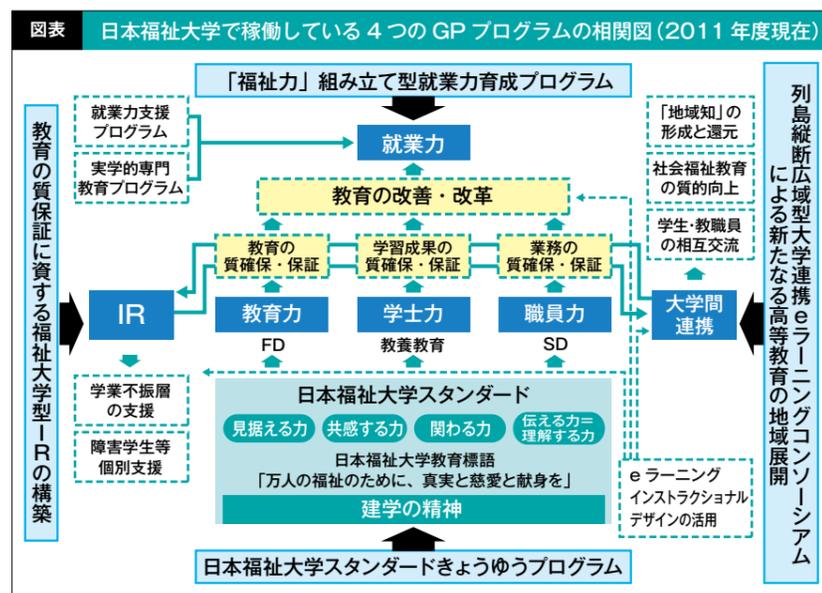
的としている。さらに、底上げされた学生が日本福祉大学らしい力を身に付け、望む職種に就けるように導くのが「『福祉力』組み立て型就業力育成プログラム」だ。

日本福祉大学には6学部があり、それぞれの学部で「福祉」について学ぶ。「現代社会は広い領域で福祉の考え方を生かすことが必要とされる。この力を『福祉力』と名付け、本学らしい就業力と位置付けている」と近藤直子副

学長は話す。

図表の「教育の質保証に資する福祉大学型IRの構築」では、学業不振を来す学生や発達障害のある学生を支援する。「列島縦断広域型大学連携eラーニングコンソーシアムによる新たな高等教育の地域展開」は、北星学園大学、熊本学園大学と連携し、教育の質的向上を図ろうというものだ。

これら複数のGPが相互に連携し合い、また補完し合って、日本福祉大学



出典/日本福祉大学資料

らしい力を身に付けた人材を育成する機能を果たしている。

### 正課内外を問わず キャリア教育を実施

日本福祉大学のキャリア教育の特徴は、正課の内外を通して、将来の目標を定め、目標に向けた学びや活動に参加できることだ。日本福祉大学スタンダードは、入学前にオンデマンド教材の「日本福祉大学入門」を映像で見ることからスタートする。大学とはどんなところか、何をどう学ぶのかを上級生や卒業生の声などで紹介する内容になっている。この取り組みを「まず大学の文化になじむため、一定の予備知識を持ってもらうためのもの」と近藤副学長は説明する。

正課のオンデマンド教育として1年次には、「福祉社会入門」や「知多学」などの授業がある。2年次には、「福祉の力」という科目があり、学童保育スタッフや障害児の保護者のインタビュー、福祉の現場で働く人々の座談会などが含まれ、モニターを通して福祉の実際を臨場感をもって知ることができるのが特徴だ。地域の人々を招いた講演会なども行う。また、キャリア形成集中講座などの正課外カリキュラムも実施している。

「福祉力」組み立て型就業力育成プログラムでは、地域の地域資源を研究する正課の地域研究プロジェクトと、興味のある職種を研究する正課外のキャリアクラブが特徴的だ。

地域研究プロジェクトでは、フィールドワークを取り入れた経済学部の「いもやプロジェクト」が企業とのコラボレーションで商品を開発するなど、地域企業との連携を通して、社会で活躍できる力を育成している。

キャリアクラブでは、医療福祉関係の事例検討会に出席したり、他大学の

障害児教育の勉強会に参加したりする活動が行われている。

### 学生が興味を持つ 多くの舞台装置を用意

日本福祉大学がオンデマンド教育に力を入れているのには理由がある。近藤副学長は「学生にはフィールドワークなどで積極的に学外へ出て、社会で活躍できる力を身に付けてほしいと思っているが、初めからそうしたモチベーションの高い学生ばかりではない。オンデマンド教材は、学生が次の一歩を踏み出すためのきっかけであり、自分のキャリアを考えるための舞台装置でもある」と話す。

舞台装置とは、学生が自律的に学びを深めていくために、正課内外を問わず、大学が用意したさまざまな仕掛けという意味だ。教員のみならず、職員も積極的に携わる。

その一例は、竹林の整備に関する活動だ。知多半島の竹林は近年大幅に拡大し、適切な管理が必要とされている。そのため、地元の美浜町竹林整備事業化協議会と協働して2010年から節祭りを開催。竹を伐採し、節汁をつくり、竹のお椀と箸で食べるというイベントで、地域の人々との協働による教育効果を意図して、職員が発案・企画した。

地域研究プロジェクトやキャリアクラブ、そのほかのフィールドワークなども学生のための舞台装置といえる。

オンデマンド教材をはじめとする舞台装置を使いこなして、社会という舞台で活躍する人材に成長することが期待されている。

### キャリア教育とは “背骨”をつくること

近藤副学長は「生きていくための“背骨”を形成することがキャリア教

育だ」と語る。大学で学ぶ過程で培った考え方、さまざまな体験、長く付き合える仲間などが財産となり、キャリア形成のための背骨となる。「学生は自分では意識していないと思うが、本学で学ぶ中で『万人の福祉のために、真実と慈愛と献身を』という教育標語の精神を自然に身に付け、相手の立場に立てるようになる。これは本学だからこそ得られる背骨となるだろう。この重要性をいかに自覚させるよう導くかが課題と考えている」。

また、キャリア形成は大学4年間だけで完成するものではなく、卒業後も継続すべきものという考えがある。同大学では社会福祉士の国家資格をめざす学生が多く、卒業後の支援や交流が欠かせないために、ネットワークを重視して全県に同窓会を置き、卒業生との連絡を密にしている。卒業後も同窓会を通じて新しい出会いを持ち、互いに刺激し合って背骨に肉付けをしてほしいという。

### 社会への幅広い告知が 今後の課題

日本福祉大学はこれまでに15のGPに選定されており、大学関係者には、同大学の取り組みは広く認知されているようだ。しかし一方で、こうした取り組みが高校生や高校教員、保護者などに伝わっているかという点、それはまだ道半ばというのが近藤副学長の思いだ。「特色ある複数のGPを連動させ、社会で活躍できる学生を育てていることを、もっと積極的に伝えていかなくてはと考えている」。

2011年度は、日本福祉大学スタンダードの実質2年目であり、「福祉力」組み立て型就業力育成プログラムは、まだ実質1年目だ。今後は、取り組みの成果をいかに広く伝えるかが課題と言えるだろう。